支局長からの手紙

「お・も・て・な・し」よりも

「西のジュネーブ、東の岡山」。国連機関などが多く人道援助活動の中心となっているジュネーブに対し、岡山は民間のNGOやNPOなどの中心的存在としてジュネーブの重要なパートナーとなる。今月、北区であった国際医療貢献フォーラム（県、AMDA主催）を聞きに行き、そんなキャッチフレーズが飾りではないという岡山の底力を実感しました。

参加したのは県内の25団体・組織。自治体や県立大、岡山大、医療機関、NPO、NGOをはじめ、宗教組織や企業もありました。災害や紛争など緊急時の医療援助はもちろん、水俣病や大気汚染の実情・教訓の紹介、モンゴルでアスベスト関連疾患のワークショップ開催など多様な取り組みが発表され、フォーラムは予定時間を超えて3時間以上に及びました。

その中で、共通する最大の目標、課題とされていたのは「人材の育成」です。「世界では毎年1500万人の子供が手術さえ受けられずに亡くなっている。私が助けられるのは年間200人。10年で2000人しかいない。でも5人の弟子を育てればその5倍、年1000人、10年で1万人を救える」。世界的な小児心臓外科医、佐野俊二・岡大病院教授の話に会場も大きくうなずきました。

2週間後、新しいカレンダーを支局の壁にかけていて、平成の四半世紀が終わろうとしていることにちょっとした感慨を覚えました。昭和に入っての四半世紀は戦争と敗戦、復興への胎動の時代といえるでしょう。では、この25年はどうだったか。バブル経済と、その崩壊に始まり、阪神淡路大震災、東日本大震災という大きな災害に見舞われました。そこで私たちが思い知らされたのは「人は助け合わなければ生きていけない」という、ごく当たり前のことだったと思います。

それなのに、のど元過ぎて熱さを忘れ、目の前のことばかりに目を奪われていないでしょうか。後世の審判に耐えうる時代の基礎を作ってきたでしょうか。温暖化と大規模な自然災害、エネルギー、人口増加、高齢化など、今のままでは地球規模の困難が訪れることは明白です。隣国とますます摩擦を深め、同盟国からも「失望」されているのが四半世紀末の日本の現状とは、お寒い限りです。

次の25年、そしてその先の世代に何を引き継いでいくのか。今年の新語・流行語の年間大賞の一つ「お・も・て・な・し」も結構ですが、私はそれより「お互いさま」という相互扶助の精神と実践ではないかと思っています。

2013年も残すところ2日となりました。みなさん、どうぞ良い年をお迎えください。

【岡山支局長・斉藤貞三郎】